

月光仮面

恐怖の秘密兵器

川内 康範



月光仮面

恐怖の秘密兵器 川内 康範



月光仮面 恐怖の秘密兵器

月光仮面シリーズ

著 者 川 内 康 範

発 行 者 櫻 井 義 晃

発 行 所 廣 濟 堂 出 版

東京都千代田区飯田橋
2-4-3 日吉ビル
電話 03-263-0781(代)
振替 東京 164137番

印 刷 所 廣 濟 堂 印 刷 装 幀

©1976 川内康範

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

みなさんへのメッセージ

川内 康範

月光仮面が、日本ではじめてのテレビ映画としてTBSから放送されたのは、昭和三十三年の一月からです。

もっと正確にいうと、その前にラジオドラマとしてラジオ東京から三十二年の九月ごろに放送されていたのです。

そのころ、日本はテレビ映画のほとんどをアメリカの輸入に頼っていました。まだ、経済的には今日の繁栄を迎えるにはほど遠い貧しさでした。したがって、世界に通用するドルの保有額がとてすくなかったわけです。

そのドルを、アメリカのテレビ映画に支払っている。これは日本人としてたいへん残念なことでした。

当時のテレビ映画のスターは空飛ぶ超人「スーパーマン」でした。

私は、日本でもなんとかしてテレビ映画をつくりたいと思っておりました。それも、「スーパーマン」のような超能力を持たない、人間臭い主人公で、正義を説きたい。

そうしたねがいがある正義の味方「月光仮面」を書くきっかけになったのです。

月光仮面の題名は、仏教に出てくる薬王菩薩の脇仏としてお仕えしている、日光、月光の二人の菩薩の中から月光菩薩をもじってつけたものです。

人間は、どんなに権力を持ち、又は仁徳をつんでも「正義」そのものにはなれません。人間は、神さまや仏さまのお説きになる愛や正義や真実を願うための手助けしかできません。

つまり正義の味方しかできないのです。

その努力の積み重ねがこの世の中を美しい花園にするのです。

私は、そのねがいをこめてこの作品を書きました。また、この作品を書くにあたって、池俊之さんをはじめ、多くの方々が協力をしてくれました。

みなさんは、これからの日本を背負って立ち、やがては日本の柱になるのです。心の背骨の正しい人間になって下さい。「憎むな、殺すな、赦しましう」がこの作品のテーマです。みんなで手を取り合って、たとえ貧しくても、心の美しい人々の住む日本にして下さい。

月光仮面
恐怖の秘密兵器
目次



危 機 迫 る	科 学 者 の 良 心	首 領 は 一 人 だ	第 一 の 犠 牲 者	事 件 突 発 す	月 よ り の 使 者	正 義 の 人	悪 魔 の 脅 迫	怖 る べ き 発 明
65	60	51	45	39	28	22	14	10





お先に失礼 さき しつれい	70
名探偵登場 めいたんていとうじょう	77
女中の正体 じよちゆう しょうたい	85
怪人D十八号 かいじんD じゅうはちごう	93
貿易商アダラ・カーン ぼうえきしやう	101
柳木博士救出 やなぎ はかせきゆうしゅつ	108
獄中の毒殺 ごくちゆう どくさつ	112
月光のくれたオルゴール げつこう	120
五郎八親分の失敗 ごろうはちおやぶん しつぱい	127





コップの水	136
忽然とわいた手紙	143
二人の対決	150
袋のネズミのどくろ仮面	156
まるで煙のように	165
永代橋下の惨殺死体	173
青山墓地のフラッシュ	179
使命か？ 妹か？	188
どくろ団のアジトは？	195





回 転 す る 壁	繁 少 年 さ ら わ る	開 か れ た オ ル ゴ ー ル	捜 査 第 三 課	謎 の 失 踪	ア ジ ト 急 襲	大 爆 発
201	209	214	228	233	238	244



装幀・サシ絵
青砥輝実



月光仮面
げつこうかめん

恐怖
きょうふ

秘密兵器
ひみつへいき



怖るべき発明

一九××年、春。

世界中の人々の眼が、こぞって日本にそそがれなければならない大事件が起きた。

「たいへんなことになったぞ」

「もう原爆も水爆もミサイルも役に立たなくなった」

「おそろしいことだ」

「いまに、日本が攻めてくるかもしれないわ」

「ああ、そうになったら戦うも戦わないもないわ。私たちはこうしていてもぜったいに死ぬんだ」

これは、各国の人々のコトバである。

いったいどうしたというのだろうか？

ゲンバクもスイバクも、そしてミサイル兵器までも役に立たないというのは、おそらく戦争に関係のあることにちがいない。しかも、軍備というほどの軍備をもたない日本が、外国を攻めて、攻められた外国の人たちは、必ず死ぬと言っているのだ。

戦わずして死ぬ——。

そんなバカなことってあるだろうか？

だが、これは諸君、事実なのだ。

ただし、戦争をすればである。さいわいにも、日本の国民は、前の戦争で、戦争というものが、どんなに人類を不幸にするものであるか、また、どんなに野蛮で下等で、しかもつまらないことであるか——ということを、何処の国よりもよく知っているので、二度とそんなおろかなことをするわけはないのであるが、

「いまに日本が攻めてくるかもしれない——」

などと噂をされるのは、それだけの理由があるからであつた。

つまりそれは、世界の人々が恐怖するに足りる、怖ろしい科学兵器が日本に完成されたからである。

H・Oジョー発爆弾——

これがそれである。

発明者は、日本科学界にその人ありと知られた柳木有三博士。そして、 $H \cdot O$ ジョー発爆弾とは、宇宙に生存する一切の動物や植物にとってなくてはならない水素(H)と酸素(O)をこの地上から、一瞬の間になくしてしまふ威力をもつ爆弾のことだ。

人間は、酸素と水素がなければ生きていけない。この簡単な生存原理を、柳木博士は、戦後幾十年間の時間を費して逆に利用することに成功したのである。

だから、もし、この爆弾を大量に製造して、日本が外国を攻撃するなら、それは人類の破滅を意味することになる。

世界各国の人々が、口をきわめて恐怖したのはこのためだった。

だが、発明者である柳木博士は、そういう、おろかしい目的のために、この研究を完成させたのではなかった。

「私は、人類の平和を守る一つの手段として、私の研究がプラスになることを望んでこれを完成させました。もし、人間が、たとえば民族はちがっても、人類という共同の幸福のために、本当に平和を求めようとするなら、やがて、この爆弾は不用のものとなりましょう。私はそれを祈りながら、さらにこの研究が、平和産業に役立つよう努力をつづけている次第であります」

——これは、柳木博士が、この世紀の發明を完成した記念すべき一瞬に、全世界に、マイクを通じて呼びかけたメッセージの一部である。つまり、博士は、外国の人々が心配していることはまったく逆に、むしろ、外国の人々よりも、もっとも切実に、心から人類の幸福を祈っていたのである。

「私は、いま世界各国が競争しているような、軍備による平和を信じてはいない。平和を口にしなから、平和をおびやかそうとする、力の強い国々の巻ぞえを喰って困っている小国の仲間として、戦争をすれば、世界は破滅する——ということを思い知らせるためにこの爆弾を發明したのだ」

どうやら、これが柳木博士の本心である。この博士の眞実を知る者は、日本にも、ごくまれにしかいなかった。

一人は柳木博士の令嬢あや子。

もう一人は、日本探偵界の知恵袋といわれる名探偵祝十郎である。

だが、どういうものか、祝十郎は、はじめから博士の研究に反対を示していた。

「先生、僕は先生の正義と人類愛を誰よりも信じます。しかし、もし、この爆弾の機密が人類の不幸……自分の国だけの為や榮譽をねがう者の手に入ったとしたらどうなさるおつもりです」

「それはどういう意味かね？」

「先生は、あまりにも善い人すぎるのです。この世の中には、他人の幸福をねたんだり、傷つけようとする者が、うようよしていますからね」

「じゃ、ひょっとして、スパイにでも私の研究が……」

「そうです。スパイの眼はもう、先生の身辺に光っているとお考えになっていいのです」

「祝君、冗談を言っちゃア困る。まさか、いくら何でも……！」

人間が人間の不幸をねがう……そんな悪魔のような心をもつ者がいるのであろうか？ いやその者たちの怖ろしい眼が、自分のまわりに、すでに光っているとは、どうしても博士には信じられないことだった。

だが、その信じがたいことが、突如として柳木博士の身辺にもち上ったのである。

悪魔の脅迫

その日、柳木博士は、H・Oジョー発爆弾に関する機密を、如何にして守るか……という重